



# DIS TRUST

NEW THINKING FOR OUR TIMES

## アネリース・ライルズ (Annelise Riles)

### イントロダクション (Introduction)

アネリース・ライルズ教授はメリディアン 180 の創設者でありリーダーです。彼女は人類学者であり法律家です。彼女は多くの学術的な取り組みにおいて人類学と法学の接合を行ってきました。彼女はプリンストン大学やロンドンスクールオブエコノミクス、ケンブリッジ大学、ハーバード大学で学び、ごく最近にコーネル大学において人類学及び法学の教授となるまで、東京やイェール、その他多くの場所で教鞭をとられてきました。また、つい 1 ヶ月前には、彼女がロバータ・パフェット・グローバルスタディーズ研究所の事務局長も務めているノースウェスタン大学において国際部門の副局長に就任されました。彼女は今日、メリディアン 180 の創設者かつディレクターとしてここにおり、メリディアン 180 のことを理解するためには彼女の話聞くこと以上の方法はありません。



### スピーチ (Speech)

今日は何と素晴らしい日なのでしょう。皆さんとここに居ることができることをとてもうれしく思います。そしてフラーやロブ、ニコラス、ブロンウェン、そして何か新たなことを一緒にできると信じて心血を注いくださった多くの方に心からの感謝を申し上げます。そして、今日第 1 に言いたいことは、私は今日皆さんと共にいることができるととても興奮しており、本当に感謝しています。

7 年前にこのプロジェクトを始めた際に、私たちは今日ここにいることを考えもしていなかったと思います。7 年間で共にしていない方々にこのプロジェクトの本当の意味を把握してもらうために、この物語がどのように始まったのかをおおまかにお話したいと思います。

ロブ (Robert Brooks, Scientia Professor, University of New South Wales) が言った様に私は人類学者であると同時に弁護士でもあり、2011 年 3 月には金融法務を専門とする弁護士と東京で実地調査を行っていました。皆さんもご記憶のように、巨大な地震と後に続く津波、そして福島第一原子力発電所の事故が発生しました。あの日、多くの建物とともに私がその時一緒に働いていた法律家や規制担当者、高位の政治家、大学のエリート、社会的なエリート、そして私自身にとっても、様々なものが根底から崩れていきました。「一体なぜこんなことが起こったのか?」と思いました。素晴らしい建築規制を持つと思っていた日本において、どうやってこのようなことが起きたのでしょうか。私たちは安全だと考えており、私たちを守るシステムを信頼できると考えていましたが、しかし山奥の避難所で人々は死にかかっており、自宅からは強制的に避難させられ、私たちはその悲劇を止めることはできませんでした。

それから私たちは疑問が湧いてきました。人類学者が情報提供者と呼ぶ人々一要するに研究協力あるいは友人という意味なのですが一と、かつてしたことのない類の話をするようになりました。私たちがどのような疑問を持ち、何を知っているかと思い込んでいたか、我々の方法論の欠点はどこで、どのように世界を捉えており、どんな所で意思疎通ができていないかといったことなどについて。そして私たちは、あの災害がタコツボ型の思考の産物であったことを理解し始めたのです。誰も福島原発事故を予想できなかったということが問題なのではありません。活動家たちが原子力発電の専門家に意見を伝えることができず、専門家は規制担当者には必ずしも意見できていたわけではなかったという点が問題なのです。これは国境を越える規模の災害であり一ちなみに事故を起こした発電所はアメリカ製なのですが一、放射能汚染はアジア太平洋地域全体、さらにはアメリカにまで拡散されようとしていました。これほどまでに国際的で様々な分野にまたがるような災害は、すぐにでも複数の観点から捉えられ、理解されなければなりません。

このような災害は意思疎通と同時にコミュニケーション断絶の産物であり、このようなタコツボ型の思考によるコミュニケーションの断絶は文字通り本当に多くの命を犠牲にしつつありました。私たちはこういったことに思いを巡らせ、そのうち「このようなことが起こるのは今回が決して最後というわけではない」と思い至りました。別の災害や危機がやってくるでしょう。それは環境の危機かもしれませんし、貿易戦争かもしれませんし、とんでもないことではあります安全保障上の危機かもしれません。その際、私たちはグループとして、私たちが危機の緩和のためにできることを全てやりきったと思えるのでしょうか？備えを万全にするには何をすればよいのでしょうか？そうして危機への備えが我々の大きな関心事となりましたが、私たちがそれについて考え、様々な学術分野や国々を再び対話に巻き込もうとしていくにつれ、同時に私たちは、問題を解決するためには異なった知識を単に縫い合わせれば良いというわけではないことを理解し始めました。

東京でプロジェクトを率いている玄田有史教授は、津波に関するあるエピソードを好んでされます。ご存知の通り、日本の学校では児童・生徒が津波に備えた避難訓練を行います。これは都市計画や環境学、教育学、心理学、経済学などの最高の知識の産物です。さらにそれは子供たちが何をすべきかを示す素晴らしいマニュアルにまで落とし込まれてきており、訓練も繰り返されてきていました。そしてあの日、福島県のある学校では子供たちが、津波が来ていることに気づき、危機に備えました。彼らはどう行動すべきか頭の中にチェックリストができていたのです。やがて、半数の子供たちが「ちょっと待って、思っていたのと何か違う。水が想定とは違う方向から来ている。僕たちはチェックリストを無視した方がいいんじゃないか。」と。残りの半分の子供たちは「いや、僕たちは何をすべきか教えられてきた。チェックリストに従おう。元々の避難計画に基づいて行動しよう」と。

そして、この小学生たちは2つのグループに分かれ、半分の児童は避難計画に従いました。そして不幸なことに、彼らは避難所とともに流され、亡くなってしまいました。もう半分の児童は避難計画を無視し、丘に登って助かりました。玄田教授は準備するということは最善の計画を作ることではなく、心を備えること、臨機応変に行動する準備をすること、創造的であること、敏捷であることである、と説きます。危機の最中でも皆で想像力を働かせ、共感と好奇心を持って考えることが重要であると。このように玄田教授は、メリディアン 180のミッションは単により優れた知識を提供するだけでなく、共感の心や好奇心、世界が強く求めているリスクを負う覚悟を持って、私たち自身がこれまでとは違う人間に変わっていかなければならないと気付かせてくれたのです。

当然、それを実現するにはとてつもなく強力な障壁がありますよね？私たち大学で働く者は皆、大学がいつでも意思決定が早く、クリエイティブな場所であるわけではないことを知っています。私たちの組織は壁を作り、私たちは予め決められた道から逸れないこと、新しいことに挑戦しないように教え込まれています。私たちはそうすれば評価されるのです。また大学には、さまざまな障壁や言語、文化、学術領域が存在し、メリディアンが目指すような仕事に取り組むもうとするには実に多くの課題があります。ここであえて言いますが、とりわけ、私たちが考えてきた、研究者としてのあり方自体が問題なのかもしれません。アイデアが創造される方法—研究者がひらめきを得た瞬間から、最終的に成果物が完成し、他の人に手渡され、願わくば世界に影響を与えるまで—について考えてみましょう。

私たち大学人は、その間の部分の仕事を担うためのよく磨き上げられ発達した仕組みを持っています。私たちは仮説を立て、データを集め、それを検証する方法を知っています。そして査読を受け、出版されますよね。しかし、そのひらめきはどこから来るのでしょうか？私たちはどこで元々の直感を得るのでしょうか？私たちがこのことについてほとんど話し合いませんが、それは一体どこからやって来るのでしょうか？そしてもし私の専門である人類学の分野で先ほどの「間の部分」の仕事のためにどれだけの投資を行なっているかを考えるのなら、最初の着想を得た瞬間から最終的な成果とするまで 10 年はかかります。これは、大学が行うには大きな投資です。もしかすると私たちの直感が、大学側が使えるほどに創造的であり活用できるということを予め確認しておかなくてはならないのかもしれません。なぜならもちろん、その時がおそらく私たちが世界に影響を与えることができ、私たちが解決すべき問題であると皆の同意を得られる時だからです。こういった課題こそが私たちがあなたに発信してもらいたい課題です。こういう点において社会は共に歩むことができます。そして同時に、私たちの知見を次の利用者に渡す時でもあるのです。

私は、最初の本を書いたときのことを覚えています。私はまだ駆け出しの研究者でした。その時、私はその本がとても素晴らしいと思っており、本を出版して、「世界が変わるわ！」と考えていました。そして私は待ちましたが、何も起こりませんでした。つまり、誰もその本を読んでおらず、教授としての視点から見れば、私は自分のアイデアをわかりやすく説明し、人々に伝えていく能力も条件も技術も持っていなかったのです。私がメリディアン 180 にできることの 1 つと考えるのは—私たちは大学や研究者だけでなく世界中の人々が参画するパートナーシップであるわけですから—こういった最初の直感を協力して生み出し、一方では世界中の人々を議論に巻き込み、他方ではこのアイデアを、それを必要とする人たちに渡していくことだと思のです。

私たちはメリディアン 180 でどうやってこのようなことを実現できるのでしょうか？私たちは変わった形態の組織です。私たちはまずもって大学間の連携機関です。もっとも新しいパートナー校であるニューサウスウェールズ大学、東京大学や慶応大学、立命館大学、梨花女子大学、ノースウェスタン大学を始め、さらに多くの大学が活動に参画します。ですから私たちは大学の文化を変え、生み出されなくてはならない最新のアイデアを協力して展開させるために、共に働いています。なぜなら、現代の天才とはもはや 1 人の天才ではなく、集合的で合作的な存在だからです。

私たちは大学間の連携機関であるばかりでなく、同時に会員制の組織です。もちろん、参画大学のすべての研究者を招待しますが、これらの大学に所属していない人たちもまた招待します。もちろん研究者以外の人たちもです。私たちは専門家やアーティスト、クリエイティブな人たち、活動家、行政職員を心から歓迎します。ここは社会の全ての分野が融合することができ、大学と社会の間にある壁を取り払っていくことのできる場所です。

私たちは会員制の組織であり、多くのことに取り組んでいます。多言語での対話をするオンラインのプラットフォームも持っています。なぜなら、私たちが行う必要のある対話をする際に、言語は1つの障壁であり続けているからです。したがって現在、私たちの全ての対話は中国語、日本語、韓国語、そして英語に翻訳されており、もっと多くの言語を増やしたいと思っています。

私たちは、ロブが先ほど言及したように、活気ある会議やイベントを行っており、また、多様な分野の学者や実務家、活動家が一緒に取り組める国際的なワーキンググループを支援しています。さらにそこでは、問題を徹底的に追及し政策提言という形で世界に影響を与えるなど、幅広く取り組んでいます。ガバナンス構造の面では、私たちはあえて民主的でとてもフラットな組織にしています。アジェンダはなく、私はよく「私たちのグループには、政治理念の両翼で逮捕される（ほど過激な主張をする）人もいて、本当に全ての価値観に対してオープンです。」と言っています。単一の論点やアイデア群で先導するのではなく、人々がつながり合うことができるプラットフォームを提供するというのが、私たちの信念です。

ここで少し例を挙げたいと思います。私たちの最初のプロジェクトの1つは中央銀行についてのものでした。私たちは世界中の中央銀行職員を集めました。また学者や中央銀行に批判的な活動家も集めました。研究者、様々な分野の人々を集めてまずはオンラインで対話が始まり、やがてそのグループから出された「中央銀行と政治との関わりはどのようなものか」というより専門的な疑問に焦点が絞られていきました。そして私たちは複数の解釈を基に、ワーキンググループのミーティングを重ねてこの疑問を掘り下げていき、最終的には社会がより積極的に中央銀行に関わっていくにはどうしたらよいかということについて、中央銀行職員のみならず社会全般に向けてある本を出版しました。このような観点は従来の中央銀行に関する議論において、全く争点とはなっていないませんでしたし、このグループのメンバーの誰も1人ではこの疑問に到達できなかったと思います。これは本当に共同作業が生み出したものでした。

これは皆さんにとってどのような意味を持つでしょうか？まず最初に、皆さんがここにいてくれて嬉しいです。皆さんは今日、おそらくこの式典の他にたくさんの予定がある中、時間を割いて参加して下さいとても感謝しています。そして、これが私たちのさらなる出会いのきっかけとなることを願います。これはあなた方にとってどのような利点があるのでしょうか？第1に、新たな共同研究者や対談者のコミュニティに接触する手段となります。このプロジェクトを通してあなたのアイデアを世界中の人々に披露し、さらにはこれまでは必ずしも繋がる方法がなかったような人と出会い、他ではできない徹底的な議論を彼らと行う手段でもあります。例えば、私たちのメンバーの1人は大きな投資銀行の頭取であり、彼は一度「私は、ダンサーや演劇人といったクリエイティブな世界にいる人と話がしたいです。なぜなら、パフォーマンスは金融の世界においてとても重要だからです。しかし、私はそのような人とどう出会えばよいかさえ分かりません。」と私に言いました。そして彼はメディアン180を通してそのような人を見つけ、会話をすることができ、そこで得たアイデアを彼の顧客に提供する商品に活用することができ、とても満足していました。

このように、皆さんにとっては構築することが難しい関係を構築する手助けが、私たちにはできます。これが1つ目のメリットですね。第2に、他では得ることのできない、あなたの仕事に対するフィードバックのようなものも得ることができます。フラーはよく「これはまさに私たち皆が望んでいるピアレビューとはこうあって欲しいというものね」と言っています。自分のアイデアを安全な場所に置くことができある。そこは同時に実験の場であり、質問をする場であり、クリエイティブな評価をする場所でもあります。また、誰かが「このアイデアは経済学の議論としてとても興味深い。私が健康科学の視点からこのアイデアを捉えた時、別の観点を見出すこともできる。」と言う場であったり、「私がダンサーとしてこの問題に関して言いたいことはこれです。」あるいは「政治家としての私の立場からはこう言いたい。」とも。他では得ることのできないあなた方の活動に対する様々な観点からのコメントを得ることができ、この方法でプロジェクトをより良く、より充実したものにできると思います。

3つ目の利点はもちろん、私たちの大学間連携がボトムアップで築かれている点です。私は新人の大学執行部メンバーとして言いますが、残念なことにほとんどの大学間の連携関係はトップダウンで始まり、そして私の見立てでは、それらはうまくは続かず、私たちが見つけたいと思っている豊かな成果を生み出しません。メリディアン180はボトムアップで運営される伝統を持った諸大学の連携であり、心から協働したいと願う人々の希望や情熱であり、私たち運営者はこれを支援するためにいます。これは本当に刺激的で新しい考え方です。

最後に、おそらく最も重要なことは、本当に変革させる力を持つであろうものに参加するチャンスであるということです。私たちはジュリー・ビショップ議員の世界における信頼の重要性についてのお話を伺ったところです。確かに今、私の国においても、私たちの文化に何が起きており、再構築に着手するにはどうしたらよいか、といったことに関する問題や疑問が実に沢山あります。そして、私たちがこのプロジェクトのために、自身と全く異なった人たちや、自身の分野の前提を共有していない人たち、言語の異なる人たち、私たちと異なる制度的状況で生まれ育った人たちと作っているつながりが重要になると考えています。私たちが共に生み出している知識には私たち単独では生み出せないものがあり、私たち全員が20年後に振り返った時に「私たちは素晴らしいことを一緒にやったのだ。」と言うと信じています。

皆さんと知り合い、共に働くこの機会はとても貴重なものであり、将来がどのようになり私たち全員に何がもたらされるか、私はとても楽しみです。そして、これを実現してくれたニューサウスウェールズ大学のすばらしい仕事に感謝の意を示したいと思います。皆さん、本当にありがとうございました。